第３学年　国語科学習指導案

＜本時の主張＞

文学的作品においては，「同じ語句や似たような表現が異なる場面で繰り返し用いられるが，その意味や価値は場面によって違っている」ということが少なからずある。

しかし中学年の子どもは，同じ言葉や似たような表現の意味や価値はいずれも同じであるととらえがちで，そのため，登場人物の心情の変化に気付くことができないことがある。

このような課題の克服をねらい，本時は次の二つの手だてを講じる。

１　心情曲線を用いて主人公の「こわさ」の程度（量）に着目させる。

２　異なる二つの「こわさ」は，同じか，違うかを問う。

これによって，子どもは異なる二つの「こわさ」の異同を検討し，それぞれの「こわさ」の対象や状況が違っていることに気付くであろう。

これにより，「同じ語句や似たような表現でも，異なる場面で用いられると，その意味や価値が異なる」ということに気づいた子どもの姿である。

１　単元名　　豆太の変化を読み取ろう

教材　斉藤隆介　作「モチモチの木」（平成 22 年度版　光村３年下）

２　単元の目標

○　課題解決に向けて意欲的に取り組んだり，斉藤隆介の他作品を進んで読んだりしている。（国語への関心・意欲・態度）

◎　豆太の心情の変化や場面の様子を，叙述を根拠にして想像しながら読み取ることができる。（読むこと）

○　「モチモチの木」を斉藤隆介の他作品を比べて読み，共通点を見つけることができる。（読むこと）

○　同じ語でも，文脈上で意味や表す心情が異なることもあることが分かる。　（言語事項）

３　単元の評価規準

国語への･関心･意欲･態度	読　む　能　力	言語についての知識･理解･技能
○　課題の解決に向けて自分の考えを作り上げたり，友達の意見を参考にしたりして意欲的に課題を解決していこうとしている。 ○　斎藤隆介の他の作品を進んで読もうとしている。	○　言葉を根拠に，場面の様子や豆太の変化・じさまの心情を想像しながら読んでいる。 ○　斎藤隆介の他の作品を読み「モチモチの木」との共通点を考えながら読んでいる。	○　理解するために必要な語句を増し，同じ語句でも文脈上で表す意味が異なることの理解を深めている。

４　児童の実態

４月に行われたＮＲＴ学力テストの結果では，国語の各領域「話すこと・聞くこと」の正答率は全国平均を１００とした場合，ほとんどの領域が全国平均を上回っているが，「読むこと」の領域は全

国平均をやや下回った。特に，「場面を想像しながら読むこと」の正答率が全国比に比べやや低かった。

４月からこれまで，「きつつきの商売」「三年とうげ」「ちいちゃんのかげおくり」の三つの物語文教材の学習を通して，叙述から簡単に読み取れるものや，叙述の中の言葉を見つけるものについては答えられるようになってきた。

しかし，10 月に行った物語文「ちいちゃんのかげおくり」の学習において，「同じ語句や似たような表現でも，その意味や価値の違いに気付きながら読むこと」ができなかった。主人公・ちいちゃんがかげおくりという遊びをする場面が物語の最初と最後に２回ある。１回目は家族と一緒に，２回目は一人きりで行う。２回のかげおくりを表す叙述は同じだが，それぞれに込められた主人公の気持ちの変化に気付くことは難しく，３分の１くらいの子どもしか主人公の心情の変化を読み取ることができなかったという実態である。

５　教材について

上記のような実態である子どもたちに出会わせる教材として，本単元では物語文「モチモチの木」を扱うこととする。

教材文「モチモチの木」は，場面の様子や登場人物の心情が民話調の温かい語り口で書かれているやさしさにあふれた作品である。

物語を構成する五つの場面には，それぞれ小見出しと美しい挿絵が入っていたり，擬人化を用いた情景描写が用いられたりしている。モチモチの木が怖い存在から勇気の象徴へと変わっていくことや，臆病な豆太がじさまを思うやさしさから勇気のある豆太へと変わっていく様子が書かれており，場面の様子や情景を，叙述をもとに想像しながら読むのに適した教材であると考える。

主人公・豆太のモチモチの木に対する「こわい」という心情は，「こわさを我慢して夜道を走る」豆太へと成長していく。このことをしっかりとつかませるため，単元の前半では夜の闇やモチモチの木をこわがる豆太の心情をしっかりとらえさせておく必要がある。具体的には下表の言葉や文章から，豆太が怖いと感じている対象と，それに対する心情をとらえさせていく。

場面	小見出し	豆太がこわいと感じている対象	叙　述	対象に対する豆太の心情
1	おくびょう豆太	大きなモチモチの木	表には大きなもちもちの木がつっ立っていて，空いっぱいのかみの毛をバサバサとふるって，両手を「わあっ。」とあげるからって夜中には，じさまについていってもらわないと一人じゃしょんべんもできないのだ。	こわい
2	やい，木ぃ	夜のモチモチの木	木がおこって，両手で「お化けぇ。」って上からおどかすんだ。夜のモチモチの木は，そっちを見ただけで，もう，しょんべんなんか出なくなっちまう。	こわい
3	霜月二十日のばん	①　冬の真夜中のモチモチの木 ②　夜・闇	・こんな冬の真夜中に，モチモチの木を，それもたった一人で見に出るなんて，とんでもねえ話だ。ぶるぶるだ。 ・ぶるぶる，夜なんて考えただけでも，おしっこをもらしちまいそうだー。 ・豆太は，はじめっからあきらめて～よいの口からねてしまった。	こわい

4	豆太は見た（前半）	①　夜の道 ②　大好きなじさまが死んじまうこと	①　豆太は，なきなき走った。いたくて，寒くて，こわかったからなぁ。 ②　でも，大すきなじさまの死んじまうほうが，もっとこわかったから，なきなきふもとの医者さまへ走った。	すごくこわい。（①は，こわい。でも，②のこわさを考えれば①のこわさは我慢できる）
4	豆太は見た（後半）	モチモチの木	モチモチの木に灯がついている。	こわくない
5	弱虫でもやさしけりゃ	大きなモチモチの木	それでも，豆太は，じさまが元気になると，そのばんから，「じさまぁ。」と，しょんべんにじさまをおこしましたとさ。	こわい

４場面「豆太は見た」の前半で，その「こわい」という心情が最高に達する。それまでとらえてきたモチモチの木に対する「こわさ」に，「じさまがしんでしまうかもしれない」という「こわさ」が加わるからである。それまでの「こわさ」が４場面前半の「じさまが死んでしまうかもしれない」という「こわさ」に加わる，その違いを読みとらせることによって，この物語の主題である「おくびょうな豆太がじさまを助けるために見せた勇気ある行動の内にある，愛する人への優しさ」を感じ取らせることができると考えている。

６　指導の構想

【第一次：「モチモチの木」を読む】

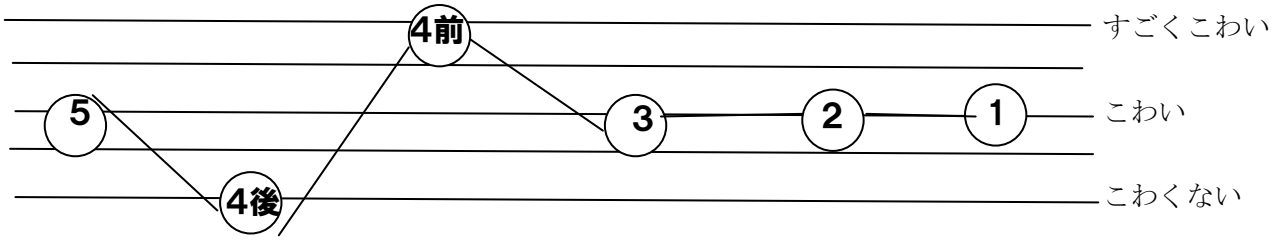
⑴　導入部の工夫：作品との出会わせ方

単元の導入では，挿絵が教科書より多く使ってあり，なおかつ大きくてインパクトのあるビッグ絵本を読み聞かせる。このことによって「モチモチの木」というお話との出会いを印象深いものとし，お話の世界のイメージをより広げることをねらう。

⑵　課題提示の工夫：心情曲線による豆太の心の変化の視覚化

主人公・豆太のモチモチの木に対する心情の変化こそ最も子どもに読み取らせたい。この変化こそが，作者が読者に最も訴えたい価値を含んでいると考えているからである。本単元では，心情曲線を取り入れる。豆太のモチモチの木に対する心情の変化を簡易折れ線グラフに表し，豆太の心情の変化が視覚的にとらえられるようにする。縦軸に「こわさ」の程度を表す「こわくない」「こわい」「すごくこわい」の三つのレベルを設定する。場面が変わるごとに豆太の心情のレベルをグラフに書き入れていき，単元終了の際には下に示したような折れ線グラフを完成させ，視覚的にとらえられるようにする。

＜心情曲線＞



上述の「５．教材について」で考察したように，１・２・３・５場面よりも４場面で，豆太の「こわい」という心情が強まることを，心情曲線を用いることによってとらえさせたい。

⑶　かかわり合いを組織するための工夫

①　考えの根拠を明らかにして話させる

自分の考えの根拠を挙げて話させることは，聞き手の子どもに自分の考えの共通点や相違点に気付かせることができ，話し手の子どもの考えを理解させることにつながると考える。

考えを書く時の型を示し，自分の考えの根拠となる言葉や文と，それが書かれているページ・行番号を意見に添えて書きこむよう指導する。

例：

自分の考え	→私は〇〇だと考えます。
根拠となる叙述の表現	→理由は，Ｐ７１・５に「えっちら，おっちら」と書いてあるから～だと思います。 （根拠とする叙述には赤傍線を引く）

②　教科書のすべてのページに行番号を書き込ませる。

文章中のどのページの，何行目の，どの言葉や文を根拠に自分の考えを作ったのかを明らかにして発表させるためには，すぐに何ページの何行目かが分かるようにしてやることが必要だと考える。

しかも，３年生段階では，教科書のページを開いて，それが何行目かを即座に言うことができず，何行目であるかを明らかにするために指で行を数える姿が見られる。そこで，教科書の行番号を予め小さく全ページにわたって書き込ませる。話し手の意図したページさえ開けば，行を探すことが容易になるように工夫する。

【第二次：斎藤隆介の「モチモチの木」以外の作品を読む】

『モチモチの木』以外の作品を読む。複数の斎藤隆介の作品を用意しておき，いろいろな作品の読書を促す。読書を開始する前に次のように働き掛ける。

モチモチの木のお話と似ているなあと思う本（「モチモチの木」型）と，似ていないなあと思う本（「非モチモチの木」型）とに分けなさい

下の表の「①『花さき山』」は，誰かのために自分のしたいことを我慢すると山に一つ，やさしさの花が咲く，という話である。「②『八郎』」は，巨人の八郎が津波から村人のために田を守り，生きたまま堤防になる話である。その他，③の話も同様に，「誰かのために行動する，その原動力となる優しさ」を大切にしているところが『モチモチの木』と共通している。

一方，「ヒバリの矢」や「かみなりむすめ」など，④～⑥の本は，別の主題で書かれた作品である。モチモチの木との共通点や相違点を探しながら多読をさせることによって斎藤隆介の作品世界に触れさせていく。

そして「モチモチの木」型の作品にこめられた作者の主張「誰かのために行動する，その原動力となる優しさ」という一連の主題の存在に気付かせていきたい。

「モチモチの木」型	「非モチモチの木」型
①『花さき山』	④『ヒバリの矢』
②『八郎』	⑤『かみなりむすめ』
③『半日村』	⑥『ふき』

読書の後，一人 1 枚の感想カードを書かせる。感想カードには読んだ感想のほかに，自分が感じた「モチモチの木」との共通点も書かせるようにする。グループ内で交流し，共通点について話し合わせる。各グループで話し合った共通点を，最後に全体で取り上げ，斎藤隆介の「モチモチの木」型の作品に流れる「やさしさ」という主題を確かめる。

7　単元の指導計画　（全 10 時間　本時：第５時　）

時	学　習　内　容	評価規準
１次　「モチモチの木」を読む。		
1	教師の音読を聞き，初めて知ったことや疑問に思ったことなどを感想としてノートに書き，友達と交流する。	【関・意・態】初めて読んで思ったことや疑問に思ったことなどを書いている。
2	場面１の「おくびょう豆太」で，豆太の「おくびょうな様子」や，じさまと二人きりで暮らしている場面設定をとらえる。『かわいそうでかわいかったからだろう』という表現から，豆太を愛しく，そして不憫に思うじさまの心情をとらえる。	【読】一人でせっちんにも行けない豆太の臆病な様子や，豆太に対するじさまの心情を読み取っている。
3	場面２の「やい，木ぃ」で，モチモチの木と豆太との関係を読み取る。昼間と夜ではモチモチの木に対する態度が変わる豆太の様子を対比し，夜のモチモチの木や夜の闇を怖がる豆太の心情をとらえる。	【読】夜のモチモチの木を怖がる豆太の心情を読み取っている。
4	場面３の「霜月二十日のばん」で，じさまが豆太に語る「モチモチの木に灯がともる」の意味を理解し，話を聞いた豆太の心情を想像し読み取る。	【読】モチモチの木に灯がともることを聞き，見てみたいが怖いという，豆太の揺れ動く心情を読み取っている。
5	場面４の「豆太は見た」前半（Ｐ68・Ｌ9～Ｐ70・Ｌ13）の，２つの「こわかった」の意味の違いに気付き，とうげの下りの坂道を泣きながらもかける豆太の心情を読み取る。【本時】	【読】夜中の坂道を泣き泣き走る豆太の様子を読み取っている。
6	場面４「豆太は見た」後半（Ｐ70・Ｌ14～Ｐ72・Ｌ13）の，モチモチの木に灯がともった情景を読み，医者様の説明とじさまの話の違いを読む。	【読】モチモチの木に灯がついた理由を医者様とじさまの説明を対比して読み取っている。
7	場面５「弱虫でもやさしけりゃ」を読み「やさしさ」の意味を読み取る。	【読】じさまの言葉から，じさまの言う「やさしさ」の意味を読み取っている。
8	豆太への手紙を書き，これまでの学習でつかんできた「豆太の成長」をとらえる。	【読】おくびょうだった豆太が勇気のある行動をしたその変化について手紙に書いている。
第２次　「モチモチの木」以外の斎藤隆介の物語を読む。		
1	斎藤隆介の他の作品を読む。	【関・意・態】斎藤隆介の他の作品を進んで読んでいる。
2	斎藤隆介の他の作品の中からお気に入りの１冊を選び「モチモチの木」との共通点や相違点を考えながら感想カードを書き，交流する。	【読】斎藤隆介の他の作品を読み「モチモチの木」との共通点や相違点を考えながら感想カードを書いている。

８　本時の学習（全１０時間　・本時は５時間目）

(1) 本時のねらい

二つの「こわかった」の違いを検討することで，モチモチの木や闇に対する怖さと，じさまが死んでしまうことに対する怖さの意味の違いに気付き，泣き泣き走った豆太の心情を読み取ることができる。

(2) 本時の構想

本時の学習では，大すきなじさまが死んでしまうことが怖かったので，夜道の怖さを我慢して走った豆太の心情に気付かせたい。そのために，次のような手だてを打つ。

① 心情曲線の活用

４場面前半の坂道を下っている時の豆太の「こわい」という心情を心情曲線の「こわくない」「こわい」「すごくこわい」の，どのレベルに位置付けるかを問う課題を設定する。

本時ではまず，単元を通して子どもたちと考えてきたこれまでの豆太の心情曲線を確認する。本時より前の場面では，モチモチの木に対する「こわさ」があることをとらえてきた。心情曲線は「こわい」レベルで推移してきている。本時「豆太は見た（前半）」の場面の怖さには，これまでとらえてきた怖さと「じさまが死んでしまうかもしれないというこわさ」が加わるため，「こわい」という心情が強まる。その変化が明確にとらえられるようにする。

それを踏まえ，本時の場面４前半の「とうげの坂道を下る時の豆太の「こわさ」の心情は，心情曲線のどのレベルか」を問う。「こわくない」「こわい」「すごくこわい」のいずれかを問うことで，「こわさ」の心情の程度（量）に着目させることになる。その際，直感やイメージで程度をとらえることがないよう，ノートに自分の考えとその根拠となる叙述を書かせる。

② 話合いを効果的に機能させる学習形態

話合い活動では，まず隣同士（ペア）で自分の考えを相手に伝える場を設ける。このことで自分の考えを必ずもたせると共に，発言する子どもの考えと自分の考えとを比較させながら話を聞かせることで，全員が考え，全員が授業に参加できるように配慮する。

ペアでの話合いが済んだら全体で検討する場をもつ。４場面の坂道を下る豆太の心情は，どのレベルに位置付けたかを発表させる。「こわくない」「こわい」「すごくこわい」の順に理由を発表させる。互いの考えの妥当性を話し合わせることによって「こわい」と「すごくこわい」の二つに話合いが収束していくものと思われる。叙述の中に「こわかった」という言葉が２回も書かれているからである。「すごくこわい」と主張する子どもの根拠の中に，「モチモチの木に対するこわさと，じさまが死んでしまうかもしれないという二つのこわさがある」という発言が出ることが予想される。そのような発言があれば取り上げ，怖さの質を問う発問へと進む。

・友達の考えが自分とどのように違うのかが見えるよう，板書を工夫する。

・自分の立場を明らかにし，自分の考えが友達に見えるようネームプレートを黒板に貼らせる。

友達の考えに納得して考えを立場を変えたいときには，席を立ちネームプレートを別の考えの札の下に移動させていいこととする。（この動作を子どもには*1ブラックボードサーフィンと名付け，国語や他教科の学習でもこの手法を取り入れている。）

③ 二つの「こわかった」の差異の検討

検討場面において，子どもの発言の中に二つの怖さについて述べているものがあれば，それを取り上げて「〇〇君が言っている二つの「こわさ」は，同じですか。違いますか。」と問い，二つの「こわさ」の違いに目を向けさせていく。一つめの「こわかった」は，同じ 70 ページの中に豆太の「こわい」と感じる心情を表す叙述がない。そこで，これまで学習してきた場面に，その根拠となる叙述を探させる。すでに学習してきたモチモチの木に対する怖さや，モチモチの木がお化けのように見える怖さなどすでに学習した豆太の心情を思い出させる。次に二つめの「こわかった」を取り上げる。それは，大好きなじさまが死んでしまうかもしれない怖さであること

＊1　現新潟大学教育学部　准教授　佐藤佐敏氏考案の手法であり，同氏の造語である。討論の際には，仲間の意見に説得されて自分の意見を修正することがある。この時に，発表者の発表に賛同してネームプレートを貼る場所を移動すること。

を確認する。ここで，一つめと二つめの「こわかった」を比較させる。大好きなじさまが死んでしまうかもしれない怖さが，モチモチの木に対する怖さを越えていた豆太の心情を「でも，大好

きなじさまが死んでしまうことの方がもっとこわかったから」という叙述の「もっと」という言葉からつかませる。

(3)　本時の展開

学習内容・活動	主な教師の働き掛けと児童の反応	指導上の留意点
1　前時までの心情曲線を確認する。	○　場面３までの豆太は，ずっと怖かったんだね。では，場面４前半の豆太の気持ちは，「こわくない」「こわい」「すごくこわい」のどれでしょう。それを読み取りましょう。	
2　教材文を音読し，内容を想起する。	○　「豆太は見た」の前半（Ｐ68・Ｌ9～Ｐ70・Ｌ13）を音読させる。	・音読は起立して行い，読み終わった子どもから着席してもう一度読むよう指示する。
3　豆太の心情を心情曲線に表す。	（心情曲線を示しながら） 医者様を呼びに坂道を下っている時の豆太の気持ちは，「こわくない」「こわい」「すごくこわい」のどれですか。 ○　医者様を呼びに坂道を下っている叙述が書かれているところは p.70l.3～p.70.l.13 であることを知らせ，話し合う場面を限定する。 こわくないと思う。 Ｃ：p.69l.13～p.70l.2 まで，表戸をふっとばして走る・ねまきのまんま・はだしで・半道もあるふもとの村まで走ったと書いてあるので，必死だったから怖くなかったと思う。 Ｃ：もし，本当に怖かったら，外に出て行けないけれど，p.70l.3 に「外はすごい星で」と書いてあるように，外に出て行けたから怖くなかったと思う。 こわいと思う Ｃ：p.70l.8 に，「いたくて，寒くて，こわかった」と書いてあるので，怖かったと思う。 Ｃ：p.70l.10 と l.11 に「大好きなじさまが死んじまう方がもっとこわかった」と書いてあるので，怖かったと思う。 すごくこわいと思う。 Ｃ：二つ「こわかった」と書いてあるので，「こわい」よりも「すごくこわい」の方がいいと思う。 Ｃ：p.70l.8 に，「いたくて，寒くて，こわかった」と書いてあるし，Ｐ70・Ｌ10・11 に「大好きなじさまが死んじまう方がもっとこわかった」と二つ怖いと書いてあるので，すごく怖かったと思う Ｃ：場面１，２，３での「こわい」は，モチモチの木がお化けみたいに見えるのが怖かったけれど，場面４の「こわい」は，それだけじゃなくてじさまが死ぬかもしれない	・本文中のどの言葉や文からそう考えたのか根拠を付けて考えさせる。 ・自分の考えと同じところにネームプレートを貼らせる。 ・「こわくない」という根拠を表す叙述が限定した場面から外れていることを後の全体での検討の際に取り上げ，話し合いを収束させる。しかし，無我夢中で医者様を呼びに行く豆太の必死な様子を，根拠を表す叙述として取り上げていれば，場面４の始めは怖くなかったという読みが成立することを確認し，「こわくない」意見を言った子どもも賞賛する。

	と思う意味の怖いというのも入っていると思う。だからすごく怖いだと思う。 C：p.70l.10 とl.11 に，「じさまが死んでしまうことがもっとこわい」，と書いてあって，今までの「こわさ」より，「もっとこわい」に変わったと思うから，「すごくこわい」だと思います。	
4　二つの「こわさ」の違いを考える。	○○君が，怖いが二つ書いてある，と言っていますが，この二つの怖さは同じですか。違いますか。 C：違うと思う。一つめの「こわかった」は，モチモチの木がこわいということで，二つめの「こわかった」は，じさまが死ぬといやだという怖さだと思う。 C：私も違うと思う。一つめの「こわかった」はp.65l.12 に「お化けぇ，っておどかす」と書いてありますよね。だから，モチモチの木が怖いんだとと思う。二つ目の「こわかった」はp.70l.10 から，「大好きなじさまが死んじまうのがこわかった，」と書いてあるので，じさまが死んでしまうことが怖いんだと思う。 C：ぼくも違うと思う。P.65l.13 に，「夜のモチモチの木は，そっちを見ただけで，もう，しょんべんなんか出なくなっちまう，」と書いてあるので一つ目の「こわかった」は夜のモチモチの木が怖いと思います。でも，二つ目の「こわかった」は，じさまがいなくなるかもしれないという怖さだと思う。	・一つ目の「こわかった」の具体を場面１，２，３から具体的に想起させる。 ・二つの「こわかった」の内容の違いを「でも」「もっと」にこだわり考えることによって，じさまが豆太にとってなくてはならない存在ということに気付くことができるようにする。
5　本時の学びをまとめる。	今日の話合いを聞いて，坂道を下っている時の豆太の気持ちを「こわい」や「こわさ」という言葉を入れて，ワークシートに書きましょう。 C：外は怖いなぁ。でも，じさまが死んじまう方がもっと怖いから，がんばって医者様を呼んでこよう。 C：じさまの病気を治すためなら，モチモチの木なんか怖くないぞ。だってじさまが死んだらいやだから。 C：じさま，待っていて。モチモチの木は怖いけれど，じさまが死んだら一人ぼっちになってしまうから，じさまのために医者様を呼んでくるぞ。	・何人かの子どもに発表させる。 【評価】（ノート・発表） 二つの「こわかった」を区別し，一つ目と二つ目の怖さの両方があることに気付いている。 A…「こわさ」の違いに気付き，二つ目の「こわかった」の方が，怖さが強いことに気付いていたことが最後のワークシートに書かれている。かつ，ペアや全体での発表でその違いについての発言が見られる。 B…違いに気付き，二つ目の「こわかった」の方が，怖さが強いことに気付いていたことが最後のワークシートに書かれ

		ている。 Ｃへの手立て →二つの怖さの違いを板書から確認し，豆太の気持ちを想像させる。